

人物・日本資本主義 [1]

地租改正

大島 清

加藤俊彦

大内 力

人物・日本資本主義 [1]

地租改正

大島 清

加藤俊彦

大内 力

東京大学出版会

大島 清 (おおしま きよし)

1913年 北海道に生まれる

1940年 東北大学法文学部卒業

現 在 筑波大学名誉教授・帝京大学教授

加藤俊彦 (かとう としひこ)

1916年 香港に生まれる

1939年 東京大学経済学部卒業

現 在 東京大学名誉教授・専修大学教授

大内 力 (おおうち つとむ)

1918年 東京に生まれる

1942年 東京大学経済学部卒業

現 在 東京大学名誉教授・信州大学教授

地租改正

人物・日本資本主義 1

1972年10月15日 初 版

1983年6月30日 新装第1刷

[検印廃止]

著 者 大島 清
加藤俊彦◎
大内 力

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 江村 稔

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内

電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 株式会社精興社

製本所 新栄社製本所

1333-44418-5149

はしがき

われわれ三人に故榊西光速氏をくわえたチームは、一九五六年から一九七〇年まで一五年がかりで『日本資本主義の成立・発展・没落』全一三冊を書いた。このシリーズもまだ完全に終わったわけではなく、おそらくごく最近の日本経済の動きがもうすこし歴史として定着するにいたれば、あらためて六〇・七〇年代を対象とした第一四巻以後の作成が要求されることになるう。しかし、いまはこのシリーズの延長の仕事は小休止の時期にあるので、その間を利用して、かねてからの懸案であった『人物・日本資本主義』のシリーズに着手することにした。ここに刊行するのが第一冊である。

i
このような書物を作ることは、『成立・発展・没落』の仕事ですすめていくあいだに、おのずから生れてきた構想であった。というのは、『成立・発展・没落』では、日本における資本主義の発達過程をひとつの歴史的・必然的な運動過程として解明し、叙述することが目的とされていたから、この過程を主体的に担った個々の人物については、ほとんどくわしくふれることはなかったし、ふれるばあいにもそれはいわば客観的な歴史過程を人格化したものとして取扱うにとどまった。もちろんそのことは、人間を無視したということではない。およそ歴史は、言葉の正しいみでは人間

社会についてのみ成立するものであるから、人間を無視した歴史などというものはありえない。ただ、ここでは人間は社会を形成するマスとして、したがって個人としてではなく階級として、経済の運動を担うものとされていたのであって、個々の人物の役割は大部分無視されるしかなかったのである。

このような扱い方は、経済史としてはあるいみでとうぜんのことである。歴史における個人の役割がいかなるものであるかは、歴史哲学なり歴史学方法論なりの大問題であって、そう簡単に決着のつくことではないが、文化史とか思想史とか、あるいは政治史にくらべてさえ、経済史ははるかに唯物論的であり、個人の役割を評価しないですむ分野であることはたしかであろう。もっとも基本的にいえば、下部構造たる経済の歴史は、生産力の増大によって動力を与えられつつ必然的に発展する過程としてあらわれるのであって、いかに偉大な指導者といえども、この客観的な法則性に従って活動する以外にはないのである。

とはいえ、われわれが歴史をその具体的な細目にまで立ちいって研究しようとするれば、経済の世界においても、個人がそれぞれに重要な役割を果している事実注目しないわけにはいかない。それはとくに革命の変革のばあいにならうが、そうでなくとも、ひとりの経済思想家の思想が経済政策に方向づけを与えたり、ひとりの政策家の努力が経済の発展をあるいは促進し、あるいは抑制し、ばあいによっては多かれすくなかれ方向をも変えたりすることは、十分みとめられる事実である。個々の企業にまで下ればひとりの有能なもしくは無能な経営者の存在がその興亡を分つこ

とはいふまでもないし、また経済界全体がひとりのリーダーの存在によって発展を促されたり阻止されたりすることもしばしばみられる。いわんや労働運動、農民運動あるいは社会主義運動といった、何らか既存の路線の変革を求める主体的な組織運動においては、思想と実践の指導者の役割はきわめて大きい。

もちろんわれわれはそういうさまざまのタイプの人物が、すべて歴史から自由であり、みずからの観念によって歴史を動かし、つくりあげたとは考えない。そのすべてが時代の子であり、かれの観念自体、かれのキャリアの、あるいはかれの社会的存在の産物であることはいうまでもない。また、個々の人間は同じ時代の、同じようなキャリアからも種々異った観念や理想をつくりだすにしても、時代の要求にそれが合致しないひとびとは、おのずから歴史のなかに埋れてしまい、指導的な役割を果しえないで終ることも事実であろう。そういうすべてを認めるとしても、個々の人物がどのようにしてみずからを形成し、その才能と経験とをもってどのような歴史的役割を果たしたか、そこでなにゆえ成功しなにゆえ失敗したかを明らかにすることは、経済の歴史においても、具体的な肉づけを与えるために欠くことのできない仕事である。

本シリーズは右のような必要を満すものとして構想された。前著『成立・発展・没落』とあわせて、いわばその姉妹篇として本シリーズを利用していただければ、日本資本主義発達史についての理解はいっそう豊富さをますであろう。そういう役割を果たすことを切に期待しつつわれわれは、この仕事をしばらくの間すすめてゆくつもりである。

本シリーズの作成についても東京大学出版会の石井和夫君にいつもながら大変お世話になった。厚くお礼を申しあげるとともに、石井君の期待に反しないよう、できるだけ早く仕事をすすめてゆくべく努力したいと決意している。

一九七二年盛夏

東京にて

大島 清
加藤 俊彦
大内 力

はしがき

第一部 背景

第一章 明治維新の性格 三

一 ブルジョア革命としての明治維新 三

二 明治維新の二重の性格——後進性と早発性 七

三 明治維新の性格と日本資本主義 六

第二章 維新政府の諸変革と地租改正 二四

一 維新政府の諸変革 二四

二 封建制度の撤廃 二六

三 新制度の創出 三三

四 近代的産業の移植 三三

五 地租改正の位置づけ 四九

第三章 地租改正の内容と経過 五二

一 地租改正の動機 五二

二 地租改正への前進 五九

三 地租改正の内容と経過 六六

四	地租改正の後産	七六
第四章	地租改正の意義	八二
一	近代財政の樹立	八二
二	近代的土地所有の確立	八五
三	地租改正と資本の原始的蓄積	八九
第二部	地租改正を担ったひとびと	
第一章	序 説	九五
第二章	神田孝平	一〇六
第一節	その生涯	一〇六
一	地租改正における神田	一〇六
二	青年期まで	一〇九
三	幕末期の社会的活動	一一四
四	明治期の活動と晩年	一二八
第二節	神田孝平の経済学	一二四
一	『経済小学』について	一二四
二	神田の経済思想	一二六

三	神田の貨幣論	一三五
第三節	地租改正と神田孝平	一四二
一	「田租改革建議」まで	一四二
二	「田租改革建議」	一四五
三	「建議」の意義	一五一
四	「建議」以後	一五六
第三章	陸奥宗光	一五九
第一節	生涯と事業	一五九
一	陸奥と地租改正	一五九
二	青年期まで	一六一
三	維新政府と陸奥宗光	一七一
四	陸奥の後半生	一八一
第二節	地租改正における陸奥	一八七
一	地方官としての陸奥と地租改正	一八七
二	租税頭陸奥と地租改正	一九七
第四章	松方正義（一）	二〇四

第一節 松方正義の生涯	104
一 松方正義と地租改正	104
二 少年時代	104
三 尊攘運動と松方	104
四 新政府における松方	110
第二節 松方と地租改正事業	117
一 地租改正にかんする松方の意見	117
二 地租改正の実施と地租改正事務局	118
三 地租改正事業	118
四 地租改正事業の終結と報告	120
第五章 若山 儀一	122
第一節 その生涯と著述	122
一 若山儀一と地租改正	122
二 青年期まで	124
三 官僚として	124
四 後 半 生	127
第二節 保護関税論と地租論	130

一	保護税説	二〇
二	地租論	二五

第一部 背景

第一章 明治維新の性格

一 ブルジョア革命としての明治維新

明治維新とふつういふあいには、一八六七年（慶応三年）一〇月一四日の徳川慶喜による大政奉還、それをうけた同一二月九日の王政復古の大号令を出発点として、旧来の幕藩体制が崩壊し、統一中央政權としての明治政府が成立するという政治上の変革過程が考えられるようである。もちろんそれはかならずしも誤りではない。しかし、かりに政治過程だけをとりあげるとしても、明治維新はいうまでもなくたんに徳川幕府から政權が天皇に移ったといった政權の移動ないし交代ではない。それは封建制のうえに立った幕藩体制の権力が、資本主義体制のうえに立つ近代国家としての権力にとってかわられた、ひとつの政治上の革命をいみするものであったといわなければならない。

3

(一) もちろんそうはいっても、成立当初の明治政府が、はじめから完全にブルジョア政權としての形態なり実体をそなえていたというわけではない。権力の移行過程たる革命は比較的短い期間のあいだに遂行されるとしても、その結果成立した権力が完成された姿をとるようになるのは、社会的な過程、とくに基本

的な生産関係の確立をまたなければならぬから、かなりの時間を要する。ここではさしあたり、新たな資本主義的諸関係の成立・発展にとって障碍とならないのみか、むしろそれを積極的に推進するような政治権力がこの過程で成立したことに着目しておけばいいのである。

しかも明治維新はたんなる政治上の変革にはとどまらなかった。というより、より正確にいうならば、こういう政治的変革は権力の移行過程自体が、徳川封建社会のなかで一定のていどまで成熟し、封建体制を^③しだいにつきくずしつつあった新たな経済的・社会的諸関係、すなわち広いいみにおける資本主義的諸関係の展開の所産であったし、したがってまたそれは、以後古い封建的な経済的・社会的体制が急激に解体、変質をこうむる反面、資本主義的諸関係により自由な展開の道が開かれる画期にもなったのであった。そのいみで明治維新は何よりもまず経済体制の、またそれに規定された社会体制の変革の画期をなすものであり、たんなる政治上の革命を超えた、社会革命としてのブルジョア革命であったというべきなのである。

(三) ここで広いいみの資本主義的諸関係というのは、いうまでもなく資本賃労働関係という狭いいみの資本主義的関係のみをいみするのではない、ということである。もちろんそれは、この狭いいみの関係を基軸として形成されるものであるが、経済的にいっても、自営の中小生産者や農民、地主等々からさまざまな新中間階級にいたるまでの、複雑な諸関係がそこにはふくまれている。そのなかのあるもの——たとえば農民経営とか家内工業とか——は、それ自体を切りはなせば資本主義的関係とはいえないのみか、ばあいによっては封建的関係といったほうがよりふさわしいものである。しかし狭いいみの資本主義的関係との関連において、それは一定の歴史的規定性を与えられているのである。

明治維新をわれわれは右のようないみでブルジョア革命と考えるが、それはかならずしも日本の学界の通説ではない。むしろ通説は、それは純粋な封建制とそのうえに立つ徳川政権とを、絶対王政としての天皇制権力のもとに再編成するいみをもった変革であり、したがって明治以降成立した経済・社会体制は、半封建的な体制と規定すべきであると理解しているといっている。いまここでそういう通説のあげるさまざまな根拠を一一とりあげ、それを検討・批判する余裕はないが、しかしこういう理解は、そもそも純粋な封建制とかブルジョア革命とか絶対王政とかといった基礎的な概念について厳密な規定を欠き、これを誤解しているばかりでなく、日本の明治以降こんにちにいたるまでの資本主義の発達についても正しい認識を欠いているというしかないであらう。こういう理解は、明治以降の日本経済のなかに、とくに小農民や中小企業のようなおくれた部門が広汎にのこっていたことや、民主主義的な政治体制が十分展開せず、天皇の権限のいちじるしく強い制度がすくなくとも明治憲法のもとでは維持されたことなどを、表面的に理解し、それを半封建的とか絶対主義的とかとよんだことから生じたもののように思われる。たしかに、後進資本主義国として出発し、すくなくとも最近の十数年間の高度成長のまえまでは、いわば小人島的な規模を脱却しえなかった日本資本主義には、しかもそうしたなかで、明治維新以来半世紀たらずのあいだに早くも帝国主義段階への移行をとげてしまった日本資本主義には、その経済のなかに後進的な部分が分厚くのこるのは、あるいみでとうぜんのことであった。また、一方ではそういう経済的・社会的な構造を基礎にし、他方では自由主義段階の展開がいちじるしく畸形的であり短期でもあったことを反映